# 川上 高司 ブログ アーカイヴ

# 2016年

# 6月2日

#### ファルージャ再び

2003 年の米軍によるイラク侵攻以来、たびたび敵対する勢力の主導権争いで戦場 となり悲惨な体験を強いられてきた、首都バグダッドの近郊にある街ファルージャが IS との闘いで再び戦禍にさらされている。 2014 年、ISIS の支配下に陥落したファ ルージャはバグダッドからわずか 70 キロし か離れておらず、バグダッドでの自爆 テロの拠点となり常に首都を脅かす存在となっ ていた。米軍は地上戦の前に敵に空 爆を実施して敵の勢力をそぐがその定石どおり今 回は 5 月 14 日から 20 日にかけ て米軍はファルージャに猛烈な空爆をしかけ、23 日 からイラク軍、シーア派人民 軍、スンニ派部族民兵部隊の総勢 1 万人の合同軍がファ ルージャを包囲し攻勢をし かけた。 事前に住民には避難するよう告知したがほとんどの住民は行き場がなく街 にとどま っていた。ファルージャはシーア派の聖地であるカルバラに近い。そのた めイランの 支援を受けたシーア派人民軍も参加しているのだが、スンニ派が多数を 占めるファル ージャにシーア派軍が入城するということ自体が、ファルージャ住民 の不安をかき立 てる。かつて熾烈な宗派抗争が勃発したがその抗争が再び起こるの ではないか。IS から開放してくれる部隊が自分たちに敵意を持っているのだ。スン ニ派住民の不安が 強いのは当然である。 もっともこの合同部隊は IS という共通の 敵に対抗しているのだから、宗派闘争の ような事熊にはならないと楽観視する声も あるが、ファルージャ奪回後の統治プラン がイラク政府にないことから混乱する可 能性は高い。 ファルージャは 2003 年まではイラクのバース党の支配下にあった。 米軍の侵攻時 にはファルージャで反米スンニ派勢力が米軍に対して徹底抗戦をし米 軍の猛攻撃を受 けて陥落したものの、2004 年にはアルカイダの支配下になり、そし て 2014 年にイラ クで最初に IS の支配下となった。まさにイラクを象徴するような 悲惨な街の歴史を 持つファルージャに、平和が戻ったときがイラクの平和が実現す る日とも言える。ファルージャの平和を願ってやまない。

#### 6月3日

#### プラハからヒロシマへの道

現職のアメリカ大統領としては初めてオバマ大統領は被爆地ヒロシマを訪問し 平和記念公園の原爆死没者慰霊碑に献花した後スピーチを行い、原爆で亡くなった被爆者を追悼するとともに「核のない世界」を将来にわたって追求していく必要性を世界 に訴えた。2009 年就任まもなくプラハで「核なき世界」を訴えた時から任期最後の

歴史的演説をヒロシマで行うとオバマ大統領はすでに考えていたに違いない。 ロシアとはモスクワ条約を締結して核弾頭数とその運搬手段の削減に合意した。残 念なことにその後のウクライナ問題で米露間が険悪になり頓挫してしまっている。一 方イランの核開発問題については歴史的な合意を現実のものとした。米露間の核軍縮は道半ばであるが、イランとの核不拡散の取り組みは一定の進展があったといえよう。そして核を戦争で使用した唯一の国であるアメリカと、唯一の被爆国である日本が手を取り合って「核なき世界」を訴えるというアピールは世界にも大きな影響を与えた。やはりアメリカが動かなければ世界は動かないという現実があり、その現実を認識した上でこそ現職アメリカ大統領のヒロシマ訪問という歴史的快挙の意味が理解できるのである。 忘れてはならないのは、オバマ大統領の「核なき世界」が一歩一歩前進するのは、ケリー国務長官という逸材がいてこそである。ベトナム戦争の体験から徹底した反戦主義者となったケリー長官の信念の外交がこの 4 年間存分に展開され、その集大成が ヒロシマといえよう。すべての道はヒロシマに通じていたのだ。

# 6月14日

#### コバニかラッカか、岐路に立つシリア内戦

シリア民主軍(Syrian Democratic Forces:SDF)はアメリカが創設したクルド人と アラ ブ人が中心の新たな反政府軍である。米軍とフランス特殊部隊が訓練し戦闘をサ ポ ートしている。その SDF は地元の武装集団と連携して ISIS と闘うので、地元の住 民からは「救世主」と歓迎を受けることが多い。〈br〉彼らが次の ISIS の支配から奪 還を目指しているのは、シリアとトルコの国境近く の街であるマンビジュである。 これまでの戦闘では SDF は米軍の空爆のサポートを 受けているので ISIS に対して 優位に立ち、ISIS は劣勢に立たされている。そのため か SDF は「向かう者敵なし」 と鼻息が荒い。だが米軍関係者は「ISIS の反撃も強く 奪還は簡単ではない」と危機 感を持っている。 問題はマンビジュ後である。SDF のクルド人たちはさらに北のコ バニなどトルコ国 境のクルド人の支配地へと進むことを考えている。だが、SDF の アラブ人たちはマン ビジュから南へ向かい ISIS の中心地であるラッカ奪還を狙って いる。この方針の違いはともすると SDF の分裂を招きかねないし、コバニへ向か うことはトルコを刺激 することになる。 SDF をアメリカが支援することに対して トルコは難色を示してきた。ISIS を駆逐す るのはいいがそこに発生した力の真空に クルド人勢力が入り込みクルド人が力を拡大 することは、トルコにとっては最悪の 事態である。トルコがアメリカへの協力に消極 的で、シリアの政治的解決にも非協 力的である理由はここにある。アメリカは SDF にもっとアラブ人を増やしてクルド の影響力を弱めるとトルコに約束しているが、親 米であるクルド人の存在は対 ISIS においては大きい。 ISIS との戦闘で主力を務める SDF をめぐってアメリカは難し い立場に徐々に追い 詰められている。アメリカが SDF をコントロールできるかど うかに、シリア内戦の 行く末がかかっている。

#### 6月14日

# 大統領選挙に陰を落とす銃乱射事件

6月12日、アメリカのフロリダ州、オーランドで起こった銃乱射事件は49人の犠牲者を出し、史上最悪の事件となった。多数の犠牲者がでる銃乱射事件はたびたび発生しておりそのたびにオバマ大統領は「何度同じことを言ってきたことか。銃規制を強化するべきだと」と悲痛なスピーチをしてきた。

今回は容疑者のオマル・マティーンがイスラム教徒であること、標的がゲイクラブであったことから、イスラムテロなのか、同性愛者をターゲットとした憎悪犯罪なのかという複雑な事件となった。イスラムテロなら国家安全保障問題であり外交政策に影響を与える深刻な事態となる。また、憎悪犯罪であれば国内政治の問題となり、性的少数者や銃規制というアメリカ社会を分断するような深刻な問題となる。

マティーンは 1986 年ニューヨーク生まれの 29 歳だった。両親はアフガニスタンからの移民であり、父親はアフガニスタンの大統領選挙に立候補するほど政治に関心が強い。タリバンやタリバンを支援するパキスタンを嫌っており、イスラム原理主義というよりはリベラル派である。

その息子であるマティーンは、宗教に関心が薄くモスクにも「最後に来て最初に帰る」タイプだった。FBI から捜査対象となったこともあったが、脅威とは見なされず監視対象にもならなかった。民間警備会社に勤めるごく普通の若者だったようだ。

ただ、同性愛を激しく嫌っていたと同僚や両親は証言した。そうであれば今回の乱 射の動機は憎悪だとみることもできるが、容疑者が射殺されているので断言はできな い。

今回の事件は大統領選挙にも影響を与えている。共和党候補のトランプは「自分の主張が正しいと立証された」と息巻く。彼は「イスラム教徒の移民は制限するべきだ」と公言して憚らない。もっともマティーンはアメリカ国籍のイスラム教徒であり移民ではない。クリントンは「テロ」と言いつつもイスラム教との関係への言及は避けている。また銃規制の強化も主張している。オバマ大統領も「テロであり憎悪だ」としてあくまで国内問題にとどめるつもりのようだ。世界もアメリカがこの事件にどう向き合うのか、注目している。

#### 6月16日

#### ロシアの思惑、イランの不信感

6月9日、ロシアの国防相、シリアの国防相がイランを訪れ、イランの国防相との3 者会議を開いた。この会議はイランの提案で設けられ、ロシアの国防相はイランとシ リアの最近のロシアへの不信感を払拭しなければならなかった。

イランのロシアへの不信感は募るばかりである。ロシアは大局的な見地からかアメリカと一時停戦の合意をしシリア自由軍への空爆を中断している。そして政治的な解決のプロセスをアメリカとともに進めている。この一時停戦はイランには全く知らされておらず、イランからすれば「いったいどっちの味方なのだ」とロシアの目的に疑心暗鬼になるのも当然だろう。5月9日のアレッポの郊外にあるカーン・ツマンという小さな村でイラン革命隊の特殊部隊が大損害を被ったが、もしロシアが空爆を実施していたらこのような損害はでなかったであろうとの思いがあるだけにその不信感は頂点に達している。

ロシアのシリア介入の目的はアサド現政権の維持であることははっきりしている。

イランの目的は、レバノンのヒズボラ、イラクやシリアへの軍事支援、武器の補給である。そのためにイランも莫大な予算をつぎ込んでいる。2011 年以来イランがシリア支援に費やしたのは 90 億から 150 億ドルと言われている。この額は欧米の経済制裁を受けていたイランにとって決して安くはない。

高まるイランの不信感を察知してロシアも 5 月 9 日の戦死者には哀悼の意を表し、 イランに知らせなかったことを謝罪した。もちろんそれだけでイランの不信感は消え るものではない。だが、ロシアの協力なしにシリアで軍事的な勝利を収めることは不 可能に近い。それゆえにイランもロシアと決裂することもできないでいる。

ロシアのアメリカとイランをてんびんにかけるようなバランス外交が失速したとき シリアの安定はさらに遠のく。

# 6月28日

#### BREXIT、それでも世界は回るートルコを屈服させたロシア

23 日に行われたイギリスの国民投票の結果、イギリスは EU 離脱の道を取ることになった。その衝撃を受けて世界は動揺し、経済危機やヨーロッパの崩壊など世界の終わりような見出しがメディアに躍った。

だが、イギリスが EU 離脱を決めても世界は回るのである。27 日、ロシアのプーチン大統領はトルコのエルドガン大統領から、一通の書簡を受け取ったと発表した。書簡にはトルコがロシアの爆撃機を撃墜したことことの謝罪が綴られていた。思い返せば 2015 年 11 月、シリア内戦が熾烈さを増すなかトルコ政府はロシアの爆撃機を撃墜、パイロット 1 名が犠牲になるという事件を引き起こした。

ロシアはトルコに謝罪を求めたがエルドガン大統領は全く応じず、ロシアの領空侵犯を責めた。怒り心頭に達したプーチン大統領は即座に経済制裁を実施、さらにロシア市民のトルコへの旅行を禁止した。以来両国の関係は冷え切った。

そして 7 ヶ月がたちトルコはロシアとの関係改善を申し出たが、ロシアは謝罪が先だとつっぱねた。経済制裁以来トルコの経済は落ち込んだ。さらにシリア内戦でもトルコは厳しい状況に直面している。、アサドの退陣を求めるトルコと存続を求めるロシアは真っ向から対立していた。シリア内戦ではロシアの支援を受けて政府側は優勢になっている。またアメリカの支援を受けたクルド人たちは勢力を拡大してトルコを脅かすようになっている。どちらもトルコにとっては最悪のシナリオである。米露がシリア問題で協調していく中、トルコは孤立しかねない。

トルコはロシアとの関係改善へ乗り出すと同時にイスラエルとの関係改善にも動き出した。2010年にトルコのガザ支援船舶をイスラエル軍が襲撃してトルコ人の犠牲者が出て以来、両国の関係は最悪となっている。結局トルコは、イスラエルやロシアとの関係を改善して中東での外交的な孤立を避け最悪のシナリオの回避し経済の回復のためにはロシアへ頭を下げるしかないという結論に達した。強権で鳴らしたエルドガン大統領が全面的に謝罪し遺族にも謝罪を伝えたいと書面には綴られていたという。イギリスの国民投票も衝撃だが、エルドガン大統領の謝罪もそれに劣らず衝撃である。

BREXIT で欧米が混乱する傍らで中東情勢は大きく動こうとしている。

#### シリア問題が対岸の火事でなくなってきたトルコ

6月29日夜、トルコ・イスタンブールにあるアタチュルク国際空港で自爆テロが発生、41人の犠牲者を出す大惨事となった。自爆犯は3人が特定され、そのうち2人はウズベキスタン人だったとの報道もある。

トルコは過去 1 年間で 17 回のテロに見舞われ 298 人が犠牲となり 1000 人以上が負傷した。トルコはこれまでクルド人過激派の PKK によるテロに悩まされてきたが、シリア内戦以降 IS のテロ攻撃にも遭っている。今回のテロもクルド人過激派によるのか IS によるのか、犯行声明が出ていない現在ではわからない。

今回のテロの動機や首謀者に関しては憶測するしかないが、テロの起きたタイミングがあまりにもシリア情勢と符号することから、IS によるテロではないだろうか。

6月29日はシリア問題に関して国連において会議が予定されていた。シリアの国連大使はアメリカのケリー長官やロシアのラブロフ外相と会合を重ね、シリアの政治的解決に向けて奔走していた。その国連での会議を経て、7月には再びシリア和平プロセス会議が米露の主導で予定されている。そこではシリアの暫定政府の枠組み構築に向けて、アサド大統領と反政府側の代表が話し合うことになっている。

米露がこのまま協調路線を取るとしたらトルコの立ち位置は難しいものになる。そのためトルコはロシアとの関係改善に乗り出した。また、イスラエルとの関係も改善に動き出しそれによってアメリカとの関係も良好にしようとの狙いが窺える。

そのような米露への接近という外交政策の転換に抗議するかのように今回のテロは起こった。IS はシリアではロシアの空爆により劣勢に追い込まれている。イラクではアメリカの支援によるイラク軍により支配下にあったファルージャを奪還された。じわじわと追い詰められる IS の矛先がついにトルコに向いたとしても不思議ではない。今後トルコがシリア和平プロセスでどのような態度を取るかを注目していきたい。